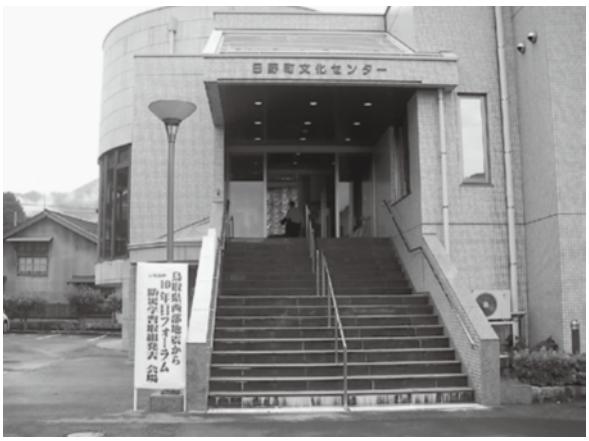
フォーラム概要

開会挨拶

10月5日　開会挨拶
（日野町文化センター）



○ 司会

只今より、「鳥取県西部地震から10年目フォーラム」を開会いたします。私は、司会進行役を努めさせていただきます、鳥取県防災局の大庭唯子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日のプログラムはお手元の白封筒にございますのでご確認ください。

開会にあたりまして、主催者の鳥取県から鳥取県防災監大場尚志よりご挨拶申し上げます。

○ 大場　尚志（鳥取県防災監）

ご紹介をいただきました、鳥取県の防災監をしております大場でございます。皆様には、本日はお忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。本日は、西部地震から10年目ということでフォーラムを開催させていただくわけでございます。

10年前の10月6日の午後1時半、鳥取県西部を震源とするマグニチュード7.3の大地震が発生しました。この地震は最大震度が6強でしたが、それを記録したのは、ここ日野町と境港市でございまして、それにより鳥取県西部一円で被害が生じたのであります。このマグニチュード7.3と言いますのは、その5年ほど前に起こった阪神大震災と同程度でございますけれども、被害のほうは格段に違います。死者はありませんでしたし、負傷者は重症を含めて141人。家屋の全半壊が2,888戸ということで、死者6,000人以上を数えた阪神大震災と比べると、被害は格段に少ないわけでございます。これは一つには、被災地の多くが中山間地域で、人口・家屋が密集していなかったということもありますが、もうちょっとずれていたらとか偶然に助けられたところも多々あろうかと思います。

西部地震から10年目を迎えるにあたりまして、こうした経験や教訓を踏まえて中山間地域の地震対策について考えていきたいということで、日野町と米子市で2日間にわたってフォーラムを開催させていただくこととしました。これにつきましては、関西学院大学災害復興制度研究所と共同で開催することにしております。この研究所では、各地の被災実態と、現行の災害法制などの社会システムとの乖離を見つけ、是正に向けた研究、提言等を行っておられます。また、日本災害復興学会ともタイアップして実施することとしております。この学会は、後ほどご挨拶いただきます、関西学院大学災害復興制度研究所の所長である室崎先生が会長をしておられまして、全国被災地交流集会という、研究者の方だけではなく、各地の復興リーダー、あるいは支援ボランティアの方が一堂に会して被災地の復興について話し合う集会を毎年開催されています。そういう形で開催しますので、このフォーラムの成果は、県内だけに留まらず、全国に向けて発信できるのではないかと期待しているところでございます。

そういうことで本日は、中山間地域の地震対策をテーマとするフォーラムを開催させていただくわけでございますが、中山間地域では基本的に人

口が流出し過疎化が進んでおりますので、西部地震のような大きな災害があっても、その経験を伝えられる人が比較的早くいなくなってしまうということがございます。この地震で大きな被害を受けた日野町でも、当時の子どもたちの多くは地域外に出てしまっていて、今いる子どもたちは震災時には生まれていないか、生まれていてもほとんど覚えていないというのが実状でございます。そういったことから、地震の経験を引き継いでいく意味でも、防災教育が非常に重要になるだろうということで、本日は、まず、根雨小学校・黒坂小学校での防災教育への取り組みについて発表していただきます。さらに、県のほうでお願いして、根雨小学校で地震に関する防災教育に取り組んでいただいている京都大学防災研究所の矢守先生に、その状況についてご報告いただきます。また、県内でいろいろと防災教育に取り組んでいただいている鳥取短期大学の浅井先生からも、その取組の状況を紹介していただこうと思っております。

その後、山村開発センターに場所を移しまして、公開の車座座談会・討論会を行います。「育てよう・災害からコミュニティを守る『地域力』」ということをテーマに、人こそインフラである、あるいは住まいの復興支援はどうするのか、中山間地の財政問題や中山間地の防災活性化対策はどうかといった問題について、全国からお集まりの皆さんにいろいろ議論していただきます。それを地元の皆さんにも見ていただくというような取組を予定しております。

さらに、明日は米子市文化ホールに会場を移しまして、本県の平井知事と室崎先生に対論的な講演を賜った上で、本日の防災教育の取組発表の概要ですとか、討論会の模様を関西学院大学の山中先生のほうからご報告いただきます。そして最後に、中山間地域におけるこれからの防災対策について、新潟県の泉田知事や中越復興市民会議の稲垣様、レスキューストックヤードの松田様といった方々にも加わっていただいて、パネルディスカッションを行うという予定にしております。

こういった非常に盛りだくさんな内容でございますけども、こうした議論や報告の中で、これからの中山間地域の防災対策のあり方をお示しいただけるのではないかと期待しております。そういったことで、鳥取県西部地震の経験・教訓が次の世代へと引き継がれ、フォーラムの提言が全国に発信され、大規模災害から国民・県民の生命、財産を守る一助になればと期待しております。 是非、そのようにしていただくようお願いして、私からのご挨拶とさせていただきます。

○ 司会

続きまして、同じく主催者である関西学院大学災害復興制度研究所所長室﨑益輝よりご挨拶申し上げます。

○ 室﨑　益輝（関西学院大学災害復興制度研究所所長）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました関西学院大学災害復興制度研究所の室﨑です。主催者を代表して一言ごあいさつさせていただきます。阪神・淡路大震災から５年目だったと思うのですけれども、鳥取西部地震が起きました。大阪でもすごく揺れまして、私の身体でその揺れをまだ覚えているところでございます。この鳥取県西部地震というのは、日本の防災対策と言うか、地震対策のあり方を大きく変えた非常に意味のある地震だと思っています。それはどういうことかと言うと、災害における地域性、あるいは防災における地方性という地域・地方の問題として地震対策を考えるという視点をしっか

り根付かせる契機となった地震でした。

先ほど死者が一人も出ていない、という話がありました。それは「地震が比較的小さかったからだ」とか、あるいは「鳥取は雪国で屋根がしっかりしていた」というような言い方をされるのですけど、僕はそうではなくて、やはり鳥取というところの伝統的な技術の文化というものがしっかりあると。家が壊れても人が死なないようにしっかりした家を造る歴史と伝統があって、その伝統の力が命を守ったと思っているわけです。

もう一つ重要なことは、その当時の片山前知事が住宅再建の支援を独自の政策として打ち出したことです。鳥取という地方都市と言うか、中山間地方において、そこの地域社会が抱えている高齢化その他の問題を解決する上では、国の画一的な対策ではうまくいかないのです。まさに防災対策の地方性という概念を入れて柔軟に地域の人々の立場に立って制度導入をするという、極めて新しい考え方を取り入れられたように思います。そういうふうに、元々あった文化や地域力みたいなものを活かされた部分と、それから地域性という概念や発想から新しい制度を作っていった部分とがあって、それらが大きなきっかけになったというふうに思っております。そういう意味で非常に大きな意味を持っているこの鳥取で 10 年目のフォーラムを鳥取県と一緒に我々の研究所が共催いたしますことをとてもうれしく思っている次第であります。そういうことで今日は、ただ単に防災教育ということじゃなくて、地域の歴史とか、文化とか、暮らし方だとか、そういうものとやはり教育というものを結び付けて、教訓を引きだす。そして、その教訓をしっかり地域に根付かせていくことが大切だろうというふうに思います。そういう意味でのディスカッションがなされるではないかということで、それは心ワクワクさせて期待しています。本日はどうぞよろしくお願いしたいと思います。

（終わり）